

室屋さん

2021.6.7

福島の方なら、室屋さんと言われて、エアロバティック・パイロットの室屋義秀さんのことを思い浮かべるのではなかろうか。室屋さんは、ふくしまスカイパークを活動拠点としているため、福島にとっては大切な人である。

その室屋さんが、エアロバティックスの最初の教官であった故ランディ・ガニエさんのことを次のように振り返っている。

一言でいうと、教え子の眠っている能力をうまく引き出すところ。まだトレーニングを始めたばかりの私に「世界チャンピオンになれるぞ！」と心の底から訴えかけて乗せてくるのです。「あとは、そのための努力をお前がやるかやらないかだ」と。言葉がけや雰囲気づくりなどで学ぶ素地をつくってあげれば、扉を少し開けるだけで、人は勝手に伸びていく。

その対極にあるのが「そんなに世の中甘くない」「努力は報われるとは限らない」という言葉。それは努力をしていない大人こそが口にするものです。

これを読んで、私が反応したのは、後半の2行である。「そんなに世の中甘くない」よく聞くフレーズである。確かに、そんなに甘くはないのだが、その前に言葉がけや雰囲気づくり、扉を少し開けることをやっているだろうか。これは、教員としても親としてもである。

言葉がけが、その人のその後の人生を大きく左右することは、多くの教え子たちが教えてくれている。「先生は、あのとき～と教えてくださいました」といった具合にである。だが、こちらは意外とそのことを覚えていないことが多い。何かをねらって言っているわけではないのである。ただ、そのときそのときで思ったことを言っていることが多い。それが、子どもたちに響くときがあったということである。

室屋さんは「自分を助けてくれる方に節目で出会っているのは本気で求めているから。チャンスは平等にある」と言っている。子どもたちが何かを求めていたのである。そこにタイミングよく、こちらの言葉がけがマッチすることがある。

一方、こちらが意図してねらって言葉がけをすると、まあ見事にうまくいかない。たいてい不発に終わる。カッコいい言葉を用意して言うのだが、さっぱり響かない。あるとき、本を読んでいたところ、同じことが書かれてあった。それからは、ねらって言葉がけをするのはやめた。いつでも出たところ勝負である。子どもたちと正面から向き合い、その場で浮かんできた言葉を投げかけるようにした。結局は、その方がいいようである。

室屋さんが世界の舞台で活躍するようになり、テレビでエアレースを見るようになった。あれを間近で見たら、ものすごいだろうと思う。いったい、室屋さんと航空自衛隊松島基地のブルーインパルスチームとでは、どちらがすごいのだろうか。どちらも超一流であり、人間技を超えているのは確かである。

野田中学校は、生徒一人一人に少しでも開く扉が用意されるよう、言葉がけや雰囲気づくりに意を配る学校でありたい。